

種子消毒は処理ムラが出ないように実施！ 浸種の水温は12℃以上、15℃未満で！ 催芽はあせらず、芽切れを確認！

やまがた温暖化対応米づくり日本一運動本部

令和7年産種子は、登熟期の高温の影響で、休眠がやや深いと見られます。浸種時の水温や芽切れの状況をしっかり確認しながら、高品質良食味米生産をスタートしましょう。

◎種子消毒は処理ムラが出ないように実施！

種子袋に詰める種籾量は最大5kg程度とし、種子消毒の手順、注意事項を十分に確認して処理しましょう。

育苗器具の洗浄・消毒もしっかり行います。

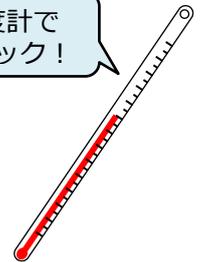
薬液や温湯につけるときは袋をよくゆすり、内部まで液を浸透させる！



◎浸種の水温は「12℃以上15℃未満」で行いましょう！

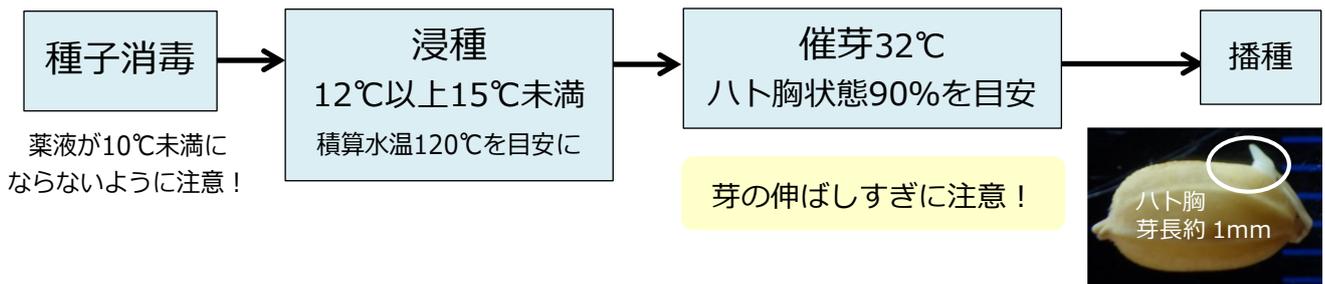
浸種を始めるときの水温が10℃を下回ると催芽時の芽切れが不揃いになります。一方で、水温が15℃を超えるとばか苗病菌が増えやすくなります。適正な水温で浸種し、積算水温は品種毎の目安を参考にして、十分吸水するように管理します。

温度計で
チェック！



◎芽切れしたことを確認してから播種しましょう！

種子の休眠が深いと、浸種の時間と水温が十分であっても、催芽を始めてから芽切れするまでの時間が、例年より長くなる場合があります。休眠が深くなりやすい「コシヒカリ」「ひとめぼれ」や酒造好適米は、特に注意が必要です。しっかり芽切れしてハト胸状態になっていることを確認してから、播種作業に入りましょう。



播種量に応じた適正な育苗期間となるよう、移植日から逆算して作業計画を立てましょう。

STOP！農作業事故！焦らず余裕を持って作業を進めましょう！